

## 第2回「アートはオシッコでもある」

まだまだ寒い日が続きますが、気持のうえだけはそろそろ春めいてきた今日このごろ、いかがお過ごしでしょうか。私はと言いますと、毎晩のように痛飲し、マゾヒスティックな沈黙の臓器である肝臓を倒錯の快楽に喘がせている次第でございます。

さて、春と言えば、というか3月といえば、そう、やはり私の誕生日でしょう。何を隠そう、私は3月29日生まれの牡羊座。御年32歳となります。関係ありませんがO型です。でも、人にはよくB型もしくはAB型と言われます。ええ、つまり変わり者だということですね、はい。ちなみに誕生日の語呂合わせは「醜い（みにくい）日」となっておりますので、記憶力に自信のない向きはそうのように覚えていただければ幸いです。

と、またおまえの話かというところで本題に入りたいと思います。今回のタイトルは、ずばり「アートはオシッコでもある」です。前回は「アートはクソでもある」ときて今回はオシッコ。ふざけるな、おまえはあれが、スカトロか何かの変態だろうとバッシングを浴びそうですが、しかし、私はそういった批判には決して屈しません。Never give upです。わざわざ英語で言い直したのには訳があります。実は、今回取り上げる作家は英語圏の人なのです。って、だからなんなんだと私自身思いますが、とにかくは、ニューヨーク出身のアンドレ・セラノ（1950～）の紹介をさせていただきます。

彼を一躍有名にした作品は「Piss Christ」という作品です。Pissは小便、Christはキリストという意味ですので、つまり小便キリストということです。これは、アトリエ、というかスタジオ（アトリエはフランス語で、英語ではスタジオというのが一般的です）の片隅に設置した巨大な水槽に、延々と大量に貯めた自分の小便に、キリスト像を沈めたところを撮影したという写真作品です。この説明だけを聞けば、漠然と下卑た作品を思い浮かべるかもしれませんが、どうして、作品は想像以上に美しい仕上がりになっています。水槽越しに撮影されたキリスト像は、小便の半透明の黄色、小便に含まれている濁った成分と気泡、そういった”神秘的な”フィルターを通して、なんとも神々しく、まるでキリストが昇天してゆくようにさえ見えるのです。

とはいえ、キリスト像を小便に沈めたという事実はどう考えても不道徳であり、散々の非難を浴びたすえ、彼は奨学金を失ったということです。もちろん、それだけで済むはずがありません。プッシュの「アフガニスタンとイラクへの侵攻は神から命じられた」などという発言に熱狂する国です（発言内容の是非ではなく、“神”という単語および存在に対するアメリカ国民の親和性の例えとして挙げました）。

2011年の4月のことです。アビニョンの美術館で「Piss Christ」が展示された際、作品を破壊することを目的とした黒メガネの3、4人組が美術館に押し入りました。そして警備員を威嚇し、「ハンマーとツルハシとスクリュードライバーのような物体」で修復不可能なほどに作品を破壊したのです。しかし、展示は中止されませんでした。その美術館館長は展示の継続について「そうすれば、野蛮人になにができるかを見ることが出来るから」と言い、人々に壊された作品を見てほしいと言ったということです。

以上が「Piss Christ」についてのごく簡単な作品概要ですが、いかがでしょうか。そこには現代アート、ひいては人類にとっての宗教、民族、世界情勢にさえも繋がる問題を見い出せるのではないのでしょうか。「アートはオシッコでもある」というタイトルで眉をひそめられた方でも、この作品にある問題の深刻さはそう簡単に一蹴することはできないと思います。

「Piss Christ」という作品は、現代アートとして、実に正しいスタンスの一つだと考えられます。前回のマンゾーニの「芸術家の糞」もそうですが、つまり、現代という状況の中で、どのような立ち位置の作品なのか。美術史の文脈の中で、どの系譜にあり、どのくらい新しいのか。そしてどのようなコンセプトを乗せているのか。これが現代アートの基本的な”作り方”なのです。また、必須ではありませんが、現代アートにとっては、物議をかもすことはひとつの”ステータス”でもあると思います。

実社会の価値観で考えれば単なる不道徳であっても、現代アートのロジックにおいては、「Piss Christ」は異端でもなんでもなく、むしろ正統派とさえ言えるかもしれません。演歌でいうところの北島三郎あたりでしょうか。いや、まったく例える必要はないのですが、とにかくは、どストレートの正統派だということです。

余談ですが、最近ではセラノは「SHIT」という作品を発表しています。つまり、ウンコです。これはもう、本当にウンコの写真作品です。神々しくもなんともなく、ただただウンコです。またウンコか！という批判につきましては、私ではなく存命中の作家にお願いいたします。私は無実です。それではまた来月、この紙面でお会いしましょう。ごきげんよう。